革命的情勢　その１

この一年をとってみると、世界のどの国でも、ロシアのように多数の政治的ストライキ参加者、ストライキのあのようなねばり強さ、あのような多様性、あのようなエネルギーは、見うけられなかった。この一事をとって見ただけでも、自由主義者や解党派諸賢のみすぼらしさ、いやしむべき愚かしさが、あますところなくしめされている。彼らは「ヨーロッパの」立憲的な時代、大衆の社会主義的啓蒙と教育の準備活動を主とする時代のものさしで 1912 ～ 1913 年のロシア労働者の戦術を「訂正」しようとしたのである。

というのは、ロシアのストライキが、もっとも先進的なヨーロッパ諸国のストライキにはるかにまさっていることは、けっしてロシアの労働者に特別な資質または特別な能力があることを証明するものではなく、革命的情勢が現に存在し、直接の革命的危機が成熟しているという意味での、こんにちのロシアの**特殊な**諸条件を証明しているだけだからである。ヨーロッパで、同じような革命成熟の時機が近づくときには（そこでは、わが国のようなブルジョア民主主義革命ではなく、社会主義革命となるであろう）、もっとも資本主義的な諸国のプロレタリアートは、革命的ストライキ、デモンストレーション、賃金奴隷制擁護者との武装闘争にあたって、くらべものにならないほど大きなエネルギーを展開するであろう。

この一年半のロシアにおけるいくたのストライキと同様に、今年の五月のストライキは、普通の経済的ストライキとちがっているだけでなく、また示威的ストライキや、たとえば最近のベルギーのストライキのような、憲法改正の要求をかかげた政治的ストライキとちがって、革命的な性格をおびている。ロシアの革命的情勢に完全に制約されているロシアのストライキのこの特質を、自由主義的世界観のとりことなり、革命的見地から物を見ることができなくなった人々は、どうしても理解することができない。反革命と背教的気分の横行の時代は、社会民主主義者と自称したがっている連中のあいだにさえ、こうした人間をあまりにも多くのこしたのである。

ロシアが革命的情勢に際会しているのは、プロレタリアートだけでなく、小生産者、とくに農民の 10 分の 9 という、住民の圧倒的多数にたいする抑圧が、最大限に激化し、しかもこの激化した圧制、飢餓、赤貧、無権利、人民にたいする侮辱が、ロシアの生産力の状態とも、1905 年によって呼びさまされた大衆の自覚や要求の程度とも、また、ヨーロッパ諸国だけでなくアジア諸国など、あらゆる隣国の情勢とも、はなはだしくくいちがっているからある。

しかし、それだけではない。どんなに大きなものであろうとも、抑圧だけでは国の革命的情勢を生みだすとはかぎらない。**下層**がいままでどおりに生活することを**のぞまない**ということだけでは、多くは革命にとって不十分である。革命にとってはさらに、**上層**がいままでどおりに支配し統治することが**できなくなる**ことが必要である。まさにそのことが、こんにちのロシアに見られるのである。政治的危機は、いまや万人の目のまえで成熟しつつある。ブルジョアジーは、反革命をささえるために、そしてこの反革命的基盤のうえに「平和的発展」をうちたてるために、彼らにできるかぎりの**あらゆること**をやった。ブルジョアジーは、死刑執行吏と農奴主に、ほしがるだけの金をあたえた。ブルジョアジーは

革命をそしり、それを否認した。……

全国的な規模の政治的危機がロシアに現存しており、しかもそれは、けっして国家機構のなんらかの部分ではなくて、まさにこの機構の**基礎**にかかわり、建物のあれこれの建て増し部分や、あれこれの階ではなく、建物の**土台**にかかわるような危機である。そして「わが国にはありがたいことに憲法がある」とか、日程にのぼっているのはあれこれの政治**改革**であるとかと（第一の命題と第二の命題との緊密なつながりを理解しないのは、あまり利口でないものだけである）、わが自由主義者と解党派がどんなに空文句をしゃべりたてようとも、この改良主義の水がどんなに流れようとも、依然として、解党派も、自由主義者もだれ一人として、現状からの改良主義的活路はなにも指示することができないでいるのである。

ロシアの住民大衆の状態、新農業政策（農奴主的地主は、最後の救いとして、この政策に取りすがらなければならなかった）による彼らの状態の窮迫化、国際的条件、わが国に生じた一般政治的危機の性格、――これこそあたえられた道では、あたえられた（政府および搾取階級に）手段によってはブルジョア的変革の任務を解決することができない結果、ロシアの状態を革命的なものにしている、客観的諸条件の総体である。

これが、ロシアの社会的、経済的、政治的な地盤であり、これが、わが国で独特なストライキを生みだした諸階級の相互関係であって、こういうストライキは、こんにちのヨーロッパでは不可能であるのに、あらゆる背教者は、そこから手本を、しかもきのうのブルジョア革命（あすのプロレタリア革命のひらめきをもった）の手本でなしに、こんにちの「立憲的な」状態の手本を借用したがっている。もしこの国に、圧制にたいする受動的な状態を憤激と蜂起の能動的な状態にかえる能力をもった革命的階級が存在しないならば、下層にたいする抑圧も、上層の危機も、それだけでは革命を生みだすものてはない。それは国の腐敗を生みだすだけであろう。

真に先進的な、真に大衆を革命に立ちあがらせる、真にロシアを腐敗からすくうことのてぎる階級のこの役割を演じているのは、まさに工業プロレタリアートである。彼らはその革命的ストライキによって、まさにこの任務を実現しようとしている。自由主義者にきらわれ、解党派に理解されないこれらのストライキは、（ロシア社会民主労働党の二月決議の言葉をかりていえば）「農業プロレタリアートと農民の無感動、絶望、分散性を克服し、できるだけ一斉の、同時的な、広範な**革命的決起に彼らをひきいれる**もっとも現実的な手段の一つである」〔本全集、第 18 巻、485 ページ〕。

労働者階級は、基本的権利をうばわれ、絶望状態に陥らされている勤労被搾取大衆を、革命的行動にひきいれつつある。労働者階級は、彼らに革命闘争をおしえ、彼らを革命的行動のできるように訓練し、活路と救いがどこに、どういう点にあるかを彼らに説明している。労働者階級は、言葉によってではなく行動によって、実例によって、しかも個々の英雄の冒険の実例によってではなく、政治的要求と経済的要求を結びつける**大衆的な**革命的決起の実例によって、彼らをおしえている。

社会主義と民主主義の学説の萌芽なりとも体得しているすべての誠実な労働者にとって、この考えはなんと単純、明瞭であり、近づきやすいものてあろう！　そして、解党派の新聞紙上で「地下組織」とそしるか嘲笑し、幼稚なお人よしにむかって、自分たち「でも社会民主主義者」だと信じこませようとしている、社会主義のインテリゲンツィア的変

節者や民主主義の裏切者にとって、この考えはなんと無縁であることか！
注）……は青山の略　　第 19 巻 P223~227『革命的プロレタリアートのメーデー』
『ソツィアル-デモクラート』第31号、1913年6月15（28）日

ポイント

ロシアが革命的情勢に際会しているのは、プロレタリアートだけでなく、小生産者、とくに農民の10分の9という、住民の圧倒的多数にたいする抑圧が、最大限に激化し、しかもこの激化した圧制、飢餓、赤貧、無権利、人民にたいする侮辱が、ロシアの生産力の状態とも、1905年によって呼びさまされた大衆の自覚や要求の程度とも、また、ヨーロッパ諸国だけでなくアジア諸国など、あらゆる隣国の情勢とも、はなはだしくくいちがっているからある。

しかし、それだけではない。どんなに大きなものであろうとも、抑圧だけでは国の革命的情勢を生みだすとはかぎらない。下層がいままでどおりに生活することをのぞまないということだけでは、多くは革命にとって不十分である。革命にとってはさらに、上層がいままでどおりに支配し統治することができなくなることが必要である。全国的な規模の政治的危機がロシアに現存しており、しかもそれは、けっして国家機構のなんらかの部分ではなくて、まさにこの機構の基礎にかかわり、建物のあれこれの建て増し部分や、あれこれの階ではなく、建物の土台にかかわるような危機である。

もしこの国に、圧制にたいする受動的な状態を憤激と蜂起の能動的な状態にかえる能力をもった革命的階級が存在しないならば、下層にたいする抑圧も、上層の危機も、それだけでは革命を生みだすものてはない。それは国の腐敗を生みだすだけであろう。

労働者階級は、基本的権利をうばわれ、絶望状態に陥らされている勤労被搾取大衆に革命闘争をおしえ、彼らを革命的行動のできるように訓練し、活路と救いがどこに、どういう点にあるかを彼らに説明している。労働者階級は、言葉によってではなく行動によって、実例によって、しかも個々の英雄の冒険の実例によってではなく、政治的要求と経済的要求を結びつける大衆的な革命的決起の実例によって、彼らをおしえている。

しかし、反革命と背教的気分の横行の時代は、社会民主主義者と自称したがっている連中のあいだにさえ、自由主義的世界観のとりことなり、革命的見地から物を見ることができなくなった人々、こうした人間をあまりにも多く出現させるのである。